

宮司間之□大怒發兵來討宗故奮日募何敵象足吾到死
之秋也然吾忠魂豈与木同朽哉健闘数人而昏自刃矣宗
故死後未十日敵將小国又四郎其部下悉死蓋其靈為山
宗云大宮司因建碑於所禪杉谷社祭之今雉絶其祭有人
信而禱之者則治病禳妖云

惟時元治二年次乙丑再議建立

(現在碑文は風化がひどく判読しにくい)

註 榑木野氏は、どんな文献によりこの文を書いた
かわからないが、『大友興廢記』には次のように

なっている。

注1 惟常は、第十代の城主佐伯惟治の兄、惟信の三男
である。

注2 感状は次のような文である。

父遠江守宗故。乍在肥州榑木野。欲立我於本国。
策已漏。及切腹之時。無比類働。古今所稀也。萬
一遂本望。於帰住佐伯者。宗故本領無相違。可充
行者也。仍状如件。

大永七年丁亥十二月八日 惟常 判

杉谷千寿丸殿

佐伯地方の石塔

(二)

五十川 千代見

(会員・弥生町提内)

役行者石像

役小角(えんのおづの)が正式の名で七、八世紀のあ
いだ大和葛城山にいた呪術者で行優婆塞(えんのうばそ
く)神変大菩薩と呼ばれている。役行者の伝説の中に説

かれる超人的な行動は、密教を基盤として発展し修験道
の中にとりいれられた。

その像容は木の葉を綴り合わせた衣服をまとい頭巾(と
きん)をかぶり、右手には錫杖、左手に経巻あるいは鉄

鉢を持ち、足には一本歯の高下駄を履いている。

各地の山の頂から頂へと飛びかける。大峰山・生駒山

・能野山で苦行したといわれ、御岳・愛宕山・金峰山などで神験を現わしたと伝えられている。

各地の霊山にはどこでも役行者開創の伝説があり、修験者の系統である山伏の開祖とされ、大先達と仰がれた。

一 佐伯市狩生区 彦岳 山頂

総高 不明（本体五十糎以下）

造立 不明

持物 右手錫杖 一本歯下駄

石質 凝灰岩

役行者の像は小形で船形光背浮彫で、なにかひ弱い感じのする像である。彦岳の山頂の岩石の上に建てられている。

近くには彦岳神社が祀られている。社は小さいが社殿の中の石碑には、

表面 彦嶽山十二神社

奉鎮座 伊弉諾尊

伊弉冊尊

裏面 寛文元辛丑年（一六六一）

正月二十八日

緒方姓入内元祖

狩生村庄屋

野々下治郎兵衛

彦火出見尊

二 蒲江町 深島

総高 不明（本体五十糎以下）

造立 不明 座像



彦岳山頂の役行者石像



軍人山の役行者石像



深島の役行者石像

持物 右手錫杖 一本齒下駄

石質 不明

役行者像は彦岳のよりは浅い彫り出しで光背は船形で突記がある。

深島の船着場より右側に登って行き、人里よりかなり離れた島の小高い場所に祀られている。

壊れかけた覆い屋根があり、もう一度訪ねて見たいが、交通が不便なのでまだその機会に恵まれない。

前号で富沢先生が写真紹介されたが、あえて再度とりあげてみた。

三、弥生町 堤内 軍陣山

総高 五十七纏

造立 不明 座像

持物 不明 一本齒下駄

石質 凝灰岩

この像が四体の中で一番凛々しく感じるが、両方の手首が失なわれているために持物が不明である。

像は愛宕神社（軍人さん）の参道を登れば、山の中腹あたりの左脇に参拝者を見守るように建てられている。

この山は女人禁制の山としても知られ、現在でもその
掟は村人達の信仰として守られている。

神社の創建は不明であるが、いま残っている棟札は宝
暦五年（一七五五）・安永二年（一七七三）江戸中期の
ものだけである。

四、佐伯市青山区黒沢 小平山

総高 一米三十三釐

造立 明治廿七年（一八九四）正月日 立像

持物 右手宝剣 左手錫杖



小平山の役行者石像

石質 凝灰岩

像は、船形光背浮彫で造立年号の他、願主小平山中と
陰刻されている。

尊像は、光背の一部と顔面が破損しているのが残念で
ある。

小平山地区の一本道の中ほど、通称庚申の森と呼ばれ
る場所に庚申塔と並立している。

庚申の森といわれているが、すでに森はなく、椋の木
だけがわづかに昔の面影を残している。

今回は役行者像を取り上げて見たが、この外にもまだ
あると思われる。御存じの方はお知らせ下されば大変有
難い。よろしくお願い致します。



(つづく)